

## ②天然採苗

現在は、ほぼ100%が人工ふ化で稚貝を採苗しているため、天然採苗は親貝を育てるだけといってもよい。昔は稚貝の採苗といえば海中に杉の枝（1～2mくらいの長さのもの）を吊るして、それに海流と一緒に流れてくるアコヤ貝の受精卵が付いて、それが稚貝に成長するという100%自然任せの方法だった。このため、稚貝の付きの良い年と悪い年があって、それがそのまま母貝の生産量に表れ、年によって母貝が余ったり足りなかったりして、多く付いた年は余った貝を捨て、逆に少ない年は母貝の価格が高騰するというように供給量も価格も不安定だった。

## (2) 母貝養殖業者

貝には、国産貝・中国貝・ペルシャ貝・ベトナム貝やそれらの貝を掛け合わせたハーフ貝（例えば、国産貝にペルシャ貝を掛け合わせたもの）やクオーター貝（例えば、国産貝に国産貝とペルシャ貝のハーフ貝を掛け合わせたもの）があるが、今はそういう貝が中心である。それぞれの貝には長所と短所があって、どういう貝を育てるかは真珠業者のニーズとそれに応える母貝業者の判断といえる。

一方、真珠業者はいい母貝を使って、いい珠を作ることが目的なので、真珠業者に人気のある母貝を作ることが母貝業者にとっては最重要課題である。

## 《母貝の育成手順》

## ア 購入

母貝業者は稚貝を稚貝採苗業者（漁協や個人）から購入しているが仕入れた時はまだ小さいため、貝の成長に合わせて稚貝袋（ナイロン製）の目の粗さを調整しながら育てる。この時期の管理は定期的に真水に30分くらい浸けて、稚貝につく寄生虫や汚れを殺すという作業が中心である。

## イ 管理

ある程度の大きさになるとネットに並べて管理するが、その頃は真水に1時間、その後は濃塩水に20分浸けて寄生虫や汚れを殺すという作業が中心で、ネットから取り

出して一個ずつ掃除をするのは出荷時の計量前を含めて2～3回である。

## ウ 出荷

養殖業者への出荷は、2年貝は4月末から5月初旬に7～10匁（1匁＝3.75グラム）で、3年貝は10月から11月に12～16匁くらいの大きさで行う。

## (3) 真珠養殖業者

真珠の生産がピークだった1994年頃の宇和海は一面が養殖筏で立錐の余地もなかった（漁場の密植状態である）。加えて海水温の上昇や赤潮の発生等により海の環境（注2）が著しく悪化して貝のへい死が多くなり、養殖業者は良い環境の漁場を求めて県内の別の地域（大三島、興居島、三崎半島等）や県外（高知県、徳島県等）へ貝を持って行って育てた。

近年の宇和海は一時の密植状態が改善され海に活力が戻り、養殖業者も本当に巻きの厚い珠を作るため当年物（養殖期間が1年未満のもの）から越し物（養殖期間が1年以上のもの）へ移行する傾向が徐々に見られる。これは宇和海産の真珠に限らず真珠の質の向上ということでも大変にいいことである。

真珠は、核入れから浜揚げまでの期間によって当年物と越し物に分かれるが、越し物は養殖期間が長く貝の死亡リスクが高くなるため、一時は当年物の生産が圧倒的に多くなった。しかし、その当年物は越し物と比べると養殖期間が短いため巻きが薄いとされるが、逆に養殖期間が短いことで珠を早く出荷でき貝のへい死率が低く抑えられることや、仕入れから浜揚げまでの期間が短く養殖の回転が速いというメリットもある。

（注2）水温やプランクトンの量など総合的な海中の状態。真珠養殖では海水温が夏は30度を超えず、冬は10度以下にならないことが理想である。また、漁場の密植状態とは海の生産力以上に貝を養殖することで、それらと海水温の上昇やプランクトン不足等が重なって貝が衰弱し、へい死率が高くなると良質の珠を作ることができない。